

外村 大著

『在日朝鮮人社会の  
歴史学的研究——形成・構造・変容』

評者：小林 知子

本書は、著者の学位請求論文（2001年、早稲田大学大学院文学研究科提出）をもとに刊行された研究書で、在日朝鮮人の歴史（特には1920年代～80年代）を「在日朝鮮人社会」という切り口から論じた労作である。

在日朝鮮人に関する史料はきわめて限定され、散在している。著者はそれらをくまなく収集し、緻密な実証研究を行った。在日朝鮮人の人口動態分析をかわきりに、日本の渡航管理における濟州島の独自性、朝鮮人が日本で職を得て生活していくうえでの人的ネットワークの状況、朝鮮人集住地の形成とその変容など、在日朝鮮人について考える際の基本的条件を、広範囲にわたり詳細に論じている。そして、在日朝鮮人の事業経営状況を新聞名刺広告を手がかりに分析するなど、在日朝鮮人の多様な生活実態を明らかにした。現在確認できる在日朝鮮人に関する主要資料が、分析されて本書に収録されている意義も大きい。本書は在日朝鮮人史に関する重要な基礎研究として位置づけられよう。

このことを前提としたうえで、しかしながら、評者自身の問題関心・視角からは本書に対して疑問を感じた箇所も少なくなかった。そもそも本書は、著者自身が「先駆的な研究を提示してきた在日朝鮮人歴史学者たち」に対し、そうし

た「研究の枠組みとは異なるし、ある意味ではそれを壊そうとする試みである」（492頁）と記すほど、従来の諸研究が扱ってきた内容・方法への批判を強く意識して書かれたものである。

著者は、在日朝鮮人史研究について「当初から、同時代の状況と強いかわりをもって展開されてきた」とし、研究者は「その時々における在日朝鮮人をめぐる状況が要請した問いに答えるために研究を進めてきた」「言いかえれば同時代における在日朝鮮人運動の影響を様々な形で受けてきた」（6頁）と述べる。そのために、たとえば1960年代までの諸研究は「日本帝国主義のもっとも悪辣な抑圧や虐待の事実と、先鋭的な民族解放運動・社会主義運動の活動のみを発掘していくという、やや広がりや欠いた歴史叙述となっていた」（8頁）と評し、その後の「日本帝国主義の抑圧やそれに対する抵抗という枠組みとは異なる側面の在日朝鮮人の歴史」研究の展開を重視している。そして、「日本帝国主義の糾弾とそれに抵抗した運動の顕彰」ではなく、在日朝鮮人の「いつも一方的に虐待されつづけそれに対して常に徹底的にたたかい続けていたわけではない」側面にも着目し、「時に権力と妥協しながらもそれなりの生活基盤を持っていた民衆の姿」を浮き彫りにすることこそ、「国民国家としての日本」を批判するうえで重要だ（11頁）と論じる。

本書を手取るにあたっては、まずはこうした本書の個性を的確に捉えることが不可欠になる。紙数の制限もあり、本稿では著者のこのような問題視角の特徴について述べていきたい。

まず、何よりも指摘したい点は、本書は「近年日本社会にやってきた外国人たちが、日本社会の一員として認められ、その文化が尊重される社会をいかにして作っていくかという課題に対して、歴史学の立場から寄与」（12頁）する

という問題意識に基づいて書かれているということである。

上述のように、在日朝鮮人史研究が「同時代の状況と強いかわりをもって展開されてきた」のだとするなら、本書の場合、それは、いわゆるニューカマー人口の急増を背景に、在日外国人問題全般のなかに在日朝鮮人など旧植民地出身者の経験が再照射されていった1990年代以降の日本社会の状況である。本書では全体にわたって、国民国家体制の相対化、多文化共生が尊重される日本社会（地域社会）の実現をめざす、という著者の意識が強く反映されて、在日朝鮮人の歴史的体験が跡づけられている。

こうした著者の視点に共感する人は多いだろう。しかし、見すごすことができないのは、このような問題意識が前面に出るがあまりに、設定された「在日朝鮮人社会」という概念が、結果として、著者自身の批判の対象でもある日本国家という領域を、多分に前提とするものとなってしまうことである。

著者はキー・ワードとしての「在日朝鮮人社会」を「日本列島に居住する朝鮮人によって形成され、民族的な独自の社会的結合や文化が維持されているとともに、そのもとで様々な活動が行われている社会」と規定しているのだが、それはあくまでも日本人社会と対比されて語られる在日朝鮮人社会であり、「日本社会の一部」なのである（102頁）。著者の論じた「在日朝鮮人」には、戦前期に短期的な商用等で滞在したり、現在留学や就労を目的に来日して「まだ日本での生活が10年ないし数年程度でしかなく、現代韓国社会で生活する韓国人と同様の意識や生活様式を保っている韓国人」などは、その範疇に含まれていない（4頁）。つまり、朝鮮半島で暮らす朝鮮人も、その意識や生活様式を何らかの意味で異にする、「在日朝鮮人」という独自の存在こそが「在日朝鮮人社会」の対象な

のである。そのため本書では、いわゆる強制連行者など戦時動員政策による在日者の動向については考察から除かれて、在日朝鮮人の社会史が語られる。そして、現在については、日本人にとって「『見えない人々』となっている在日朝鮮人」（12頁）と、「日本社会の一員として認めてほしい」在日朝鮮人との関係を軸に「共生」の課題が位置づけられる（471頁）。

とはいえ、本書の特徴のひとつは、著者が、朝鮮－日本間の朝鮮人の往来の実態やその影響について、詳細に検討を加えているところにある。朝鮮半島との関係をも重視しながら在日朝鮮人をめぐる問題について研究を進めてきた評者にとって、この部分は特に興味深かったところである。渡航管理下にありながらも、戦時期を含めて朝鮮－日本間の朝鮮人の往来が頻繁に行われていたことは、先行研究でも既に指摘されてきたことだが、本書でこうした問題が、実証的かつ総合的に論じられていることは注目に値する。

しかし、本書では上述のような「在日朝鮮人」「在日朝鮮人社会」規定が前提になっているために、惜しくも、著者が明らかにしたこのような在日朝鮮人と朝鮮半島との関係性が、本論の展開には十分に生かされていないように思われる。たとえば、日本で暮らす以上、朝鮮在住者との生活様式上の違い（衣服に限らず、言語についても）は当然生じているとしても、「朝鮮人」としての意識が顕著で、朝鮮の出身地との紐帯を保持し、地縁・血縁が生活のうえで非常に重要な意味を持っていた時期の人びとをも、あえて「在日朝鮮人」として日本社会のなかに位置づけていくことが妥当なのか、ということである。今日までの朝鮮近代史研究には在外朝鮮人の活動が視野に入っていないと批判する（59頁）著者ならばこそ、まさに国境の枠組みを超えた在日朝鮮人の存在性を、本質的に重要

な観点として、本論の基調のなかに位置づけてほしかった。

もっとも、著者が示したような、20世紀における在日朝鮮人の足跡は基本的には日本の地域社会のなかに収斂されていくという見解は、今日の在日朝鮮人一般状況をめぐって、よく指摘されている見方といえるかもしれない。本書でも著者がかなり重視して論じているように、当時の文献資料からは、1930年代において既に在日朝鮮人の若者のあいだでは、自己の民族的アイデンティティをめぐる苦悩を表明している者が少なくなかったことを読み取ることができ、著者はそこから現代の在日朝鮮人の抱える問題について考える視座を論じるのである。しかし、1930年代当時の一部朝鮮人らの主張を「今日言うところの多文化主義的な定住志向」（483頁）と位置づけ、それを、著者の言う1950年代半ば以降の「国民国家の上に立つ」「祖国志向型ナショナリズム」から、回復すべき方向性として論じていることには疑問を感じる。

この部分を少し具体的に説明したい。著者は、大日本帝国を支持し内鮮一体を主張する人物と著者自身が位置づけている高権三のような朝鮮人の主張を、発想としては「ナショナルなレベルの帰属意識や文化を前提としないローカルな多文化主義」（272頁）として今日的観点から注目する。他方、在日朝鮮人の「祖国志向型ナショナリズム」は、「戦後の日本国家および日本人への対応＝帝国主義の加害の歴史への無責任と日本社会からの排除から生み出され」たものの、「それをある意味では補完する役割を果たしていた」（450頁）し、「在日朝鮮人の抱えていた様々な課題を解決するものではなかった。むしろ、ある面においては矛盾を矛盾のままにしておくような作用を果たした」（484頁）と評価する。そして、「祖国志向型ナショナリズム」とは「国家の論理とは区別される、人間として

基本的な権利を求める思い」の一表現である（484頁）ことにあらためて立ち戻ったうえで、在日朝鮮人の現代の課題は「日本社会に参加しその一員として認められること」と「朝鮮およびそこにいる人びととの紐帯を回復していくこと」だと総括している（485頁）。

このような論旨の展開をみると、本書は、国民国家体制批判という一点から、日本の帝国主義支配と朝鮮の民族独立闘争との関係や、冷戦の展開と不可分に進行した朝鮮分断をめぐる問題を、あまりにも在日朝鮮人民衆から超越的なものとして位置づけてしまったと感じざるをえない。特に問題なのは、その1930年代と50年代半ば以降とをつなぐ、1940年代および朝鮮戦争の時期の激動が朝鮮人民衆の日常生活のレベルにまで及ぼした影響力が、著者の問題設定からは、相対的に軽視されてしまったことである。19世紀末から今日に至るまでの、まさしく既存の国家体制、国際秩序に抗い、その変革を求めつづけてきた朝鮮民衆の足跡そのものは本書の視野にほとんど入ることがなく、民衆の意に反して形成されてきた東アジアの国際秩序や朝鮮の分断体制を前提に、現存国民国家の相対化が模索されているように思われる。

帝国主義体制の世界において、それへの抵抗・異議申し立ての集団的枠組みとされたのは民族であり階級であった。ナショナリズムについては、国民国家のいわばマジョリティ国民（民族）でなければ自己決定権すら行使できないという現実をもふまえながら、歴史的に位置づけ論じていく必要があると考える。しかし本書では、戦前においては大多数の民衆の朝鮮に関わる帰属意識は「しばしば国家ではなく、故郷のムラといった」「ローカルな単位」であったという観点から、「あくまでも帰属の対象は一国を構成すべき朝鮮」であると主張するマルクス主義者やコミュニティのリーダーたち

(283頁)との意識のズレが強調される。日本敗戦・朝鮮解放直後では、一部在日朝鮮人の間では「自分たちも日本社会の一員である」という立場が見られたものの、朝鮮戦争下では「生まれ育った土地やそこの文化への愛着といったものではなく、国家に対する意識」としてのナショナルリズムが在日朝鮮人のなかで高揚し、それによって、日本人の側においても在日朝鮮人に対する単一民族国家論に基づく排外主義が強まったと論じられる(440頁)。そして、在日朝鮮人にも日本人にも「『朝鮮人は朝鮮国家に帰属するものである』ないし『日本国は日本人によってのみ構成される』という国家の論理」が受け入れられていった(472頁)ことにこそ批判の力点が置かれている。そこではローカルとナショナルなレベルが対立的、拮据的に論じられているために、実は、個々人のアイデンティティとは重層的なものであり、ローカルな意識もナショナルな意識も共有しうる存在であるということから国民国家体制を問うという視点は弱い。そのために本論においては、元来のトランスナショナルな生活形態そのものから在日朝鮮人を捉えるという観点が十分に生かされないばかりか、東アジア冷戦下における日本と朝鮮半島との関係性の遮断のなかで、日本のなかの朝鮮人社会とでもいうべきものが「在日朝鮮人」社会化させられていくという方向へは展開しない。要するに、日本における朝鮮人社会では、戦前には朝鮮半島との間で絶え間ない人的・物的交流を保持してきたにもかかわらず、第二次大戦後、東アジアひいては世界における国際秩序再編のなかでかつての「流動性」が奪われてしまったこと、このこと自体に対する批判的問題意識は、本書では、ほとんど見うけられないのである。

本書全体で述べられている、多様な民衆レベルの動向を軸にすえて在日朝鮮人の歴史を捉え

なおすべきだという著者のスタンスは評者自身も理解できるし、在日朝鮮人運動を戦術論的に跡づけるだけでは在日朝鮮人の歴史的経験の全体像をつかむことができないことはよくわかる。しかし、こうした観点を意識しながら、在日朝鮮人の体験を、東アジアひいては世界レベルでの国際関係史の展開のなかに位置づけることも可能であると考えられる。本書においては、問題設定枠組みにも限定され、著者は関東大震災にも朝鮮人戦時動員の問題にもほとんど言及しえなかった。在日朝鮮人に関する膨大な資料を丹念に読み解いてきた著者には、日本に定住する者だけでなく、南北朝鮮における朝鮮人はもちろん、東アジア、世界において共有すべき在日朝鮮人の歴史的体験とはどのようなものになるのか、あらためて問いたい。

2000年6月に南北朝鮮のあいだで初の首脳会談が実現して以後、紆余曲折は経ながらも、南北間における和解と協力の関係構築は、たゆみなく続けられている。同時に韓国では、「日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会」「親日反民族行為真相糾明委員会」等の発足・活動に象徴されるように、朝鮮近現代史の問い直しが政府レベルでも推進されている。日本においては朝鮮半島におけるこうした事象の展開はほとんど共有されておらず、それは日本人一般ばかりではなく多くの在日朝鮮人についても同様である。評者自身は、こうした流れにも合流していく在日朝鮮人の足跡こそが、国民国家日本をも相対化していく東アジアを構築するものになるのではないかと考えるのだが、どうだろうか。

(外村大著『在日朝鮮人社会の歴史学的研究—形成・構造・変容』緑蔭書房、2004年3月、xii+493頁、定価7000円+税)

(こばやし・ともこ 福岡教育大学国際共生教育講座 助教授)